



「60歳からの生き方」の講演をする多湖輝先生

五・五パーセント、デンマークが十五・一パーセント、西ドイツが十五・〇パーセント、あとイタリヤ、フランス、アメリカというのはもう少し低いんですけれども、十二・三パーセントということになっています。ひとつの目安は、この総人口に占める六十五歳以上の人の割合が七パーセントから十四パーセントへ移行していく、これが高齢化社会に向かっていくということでありす。それで、十四パーセントに到達すると、高齢化社会とはもう言わないで、高齢社会と言うふうには呼ぶのであります。一応専門家の間ではそういう習わしになっていくようでありすけれども、その高齢化にどんどん向かっていく我が国では現在十一・六

パーセントくらいですから、もう少し間があるんですが、普通七パーセントから十四パーセントに到るまでの年数というのが問題になります。これが、フランスの場合大体百三十年かけて徐々にそういう状態になっていったんです。それからスウェーデンは八十五年、アメリカが七十五年、イタリヤが五十五年、西ドイツ、イギリスは大体四十五年と、この中へ我が国は二十六年でその状態に達していくということですから、これは相当な速さですね。世界中から注目を浴びるような独特な国であります。とにかく、急速に高齢化社会に向かっていくということでありす。それに伴って、いろいろなことが起こるわけでありすけれども、まず経済の担い手が少なくなる、これはもういつも挙げられる例でありす。一九八八年のデータで六・二人の生産人口、生産人口というのは十五歳から六十四歳までの、まあ若手の連中が一人のお年寄りを支えるということなんです。つまり六十五歳以上の高齢者を六・二人で支えていた、それが、やがてくる二〇二〇年には、これはよく聞かれる例でありますけれども、二・五人で一人のお年寄りを支えていかなければならない。しかも、高齢者というのはもう、八十、九十、というような人がたくさん増えていきます。昔は大体、ある年へ来ると病死したものであります。今はなかなか病死ができません。それでいつまでも長生きされます。

これが、いわゆる今日のテーマであります。ライフサイクルプラン。ライフサイクルプランも非常に大きく、変わってきたわけ。今、正直言って、みなさんは退職なさいますと、一時はきつと茫然となさるかもしれません。けれども、本当に今から準備をなさっていた方はきつと幸せに満ちあふれるという感じがすると思えます。つまり、いやなこととはやらなくていいんです。こんな世界というのはないです。

いやな仕事をやらなければいけない。いやな仕事をやらなければいけない。自分が楽しい仕事だけやっていけるのですから、こんないい人生はないと思えます。ですから私は、六十五歳以上の方をシルバー・エイジというのは、とんでもない話だと思っております。私は、六十歳代は、少なくとも、ダイヤモンド・エイジというのが実感です。

七十になつてからは、ゴールド・エイジというものがあるでしょう。八十になつてからは多分ですね、あるいはシルバー・エイジと言えるような時が来るかも知れません。それで、問題は六十からずつときまして七十があつて、八十があつて、そして九十があります。ここから先へまだ延びていくとするとこの先に実はいわゆる、グレイゾーンというものがあつて、これが高齢化の問題なんです。本当の意味での問題というのは、このグレイゾーンをどう生きるかという、これだけのことなんです。つまり、シルバー

までは、自分で自分の体を自分で処理できる、そういう時期であります。しかし、問題はこの時期以後のことです。これは一つの目安でありますけれども、賢い人はずつとこのグレイゾーンを後ろに延ばしていくのです。グレイゾーンを極端に短くしましてあつという間に世へ飛び出すというのが、一番いいんです。ですから私はこのグレイゾーンが問題でして、このところをどう扱うかということ、みなあまり真剣に考えてないんです。その前のところなんか、問題ではないのであります。今、この対策が問題であります。人間の生命とか、人間の人格とか、人間そのものの尊厳をどこまでみんな守っていくかとするかというの、このグレイゾーンの大テーマなんです。残念ながらそういう点では我が国は、まだまだです。

ヨーロッパの福祉先進諸国というのは、主に北欧ですが、今、寝たきりという言葉が完全に死語になりつつあるということなんです。

ともかく今お話しましたように日本の高齢化の問題というのは急速になつてきたということ、それからもう一つは、その準備がうまくできないような人たちが実は世の中にたくさんできて、ということですね。それに対して我々はどう備えていくかとい